

平成州紙



おりおりの記

国際社会の平和と安寧のために

昭和電工
最高顧問

大橋 光夫

若干旧聞に属するが、7月に全くの個人旅行でニューヨークを訪問した。

ブロードウェイ、タイムズスクエアなどに集まる観光客、特に若者が発するエネルギーに圧倒されながら群衆の中を歩く。

タクシーやトラックが発する騒音や警笛、ビル工事現場から発せられる溶接やドリルの音などが混じり合う。レストランでも状況は同じだ。大声を出さねば会話が通じない。すると隣席の声はさらに大きくなる。マナーも酷い。男性が食事中に帽子を脱がないなどで驚いてはいられない。

今のニューヨークは喧噪と無秩序と言っても過言ではない。

私が知る60年代のニューヨークはあらゆる意味で西側自由主義社会の手本だった。理想に燃え、世界を牽引していく決意を示したケネディ大統領の就任演説を引用するまでもなく、米国を象徴する大都市としての風格があった。

旅行中TVのライブで、来月8日に迫った大統領選挙の候補者を決定する共和党大会の一部始終を見る機会に恵まれた。しかし、候補者や支持者の演説に一度も品位や格調の高さを感じなかった。今回の選挙が例外であれば幸いだが、私は今後の米国はこの流れに拍車がかかるのではないかと危惧する。

他方、ビジネスの視点で考えると、グローバリゼーションが進展する中で、米国の存在感はさらに大きくなりそうだ。米国の移民社会が形成するエネルギーは群を抜く。21世紀はアジアの世紀と

言われるが、米国のエネルギーは世界中の企業に対し引き続き大きなビジネスチャンスを与えるのではないか。事実、先進国の中で人口の大きな増加が期待されるのは米国において他にない。

翻って日本はどうか。国が発するエネルギーという点では到底米国に敵わない。これは中長期的な人口減少、少子高齢化だけの問題ではない。極東の島国という環境の中で2千年以上に亘り養われてきたDNAが関わっている。

だとすれば、日本が国際社会に貢献すべきは物質文明だけであってはならない。もちろん技術大国としての使命は重要だ。しかし、今日の世界は人種、民族、宗教などの対立による紛争や混乱が続く。さらにインターネットの普及は、国際社会における格差の存在を瞬時に全世界に知らしめることとなった。

そう考えると、日本は先端技術において世界に貢献する使命を果たしつつ、今こそ日本と日本人が培ってきた「寛容と調和」の高い精神性を世界に示し、国際社会の平和と安寧に役立つ時だと私は信じている。

